「廣瀬淡窓旧宅及び墓」の
国史跡追加指定並びに名称変更の概要資料

廣瀬淡窓旧宅及び墓の文化財指定答申

平成 24 年 11 月 16 日開催の文化審議会（会長：宮田亮平）において、昭和 23 年 1 月 14 日に国の史跡指定を受けている「廣瀬淡窓墓 (ひろせたんそうのはか)」（別名 長生園 (ちょうせいえん)）に、新たに「廣瀬淡窓旧宅 (ひろせたんそうきゅうたく)」を追加指定し、名称を「廣瀬淡窓旧宅及び墓」と変更するよう答申が出されました。

今回の答申で、日田市の国史跡数は 6 件と変わりませんが、廣瀬淡窓旧宅が新たに史跡に加わることになります。旧宅の史跡指定は、県内では国東市の思想家・三浦梅園旧宅（昭和 34 年）に次いで 2 例目となります。

廣瀬淡窓旧宅

廣瀬淡窓旧宅は、江戸時代後期の文化 14 年（1817）に開塾した私塾咸宜園に代表される教育施設において、学業成績評価表である「月旦評」や規則正しい塾生活のための「規約」、塾生に塾や寮を運営させる「職任」といった独自の教育制度を生み出し、かつ実践し、全国から集ったおよそ 5 千人の門下生を輩出した教育者廣瀬淡窓の生家です。

旧宅は魚町通りを挟んで南北に分かれています。淡窓は北を「北家」、南を「南家」と呼び分けていました。敷地面積は「北家」が 1,308.11 ㎡、「南家」は隠宅庭園を含めて 859.95 ㎡の合計約 2,168.06 ㎡です。（廣瀬淡窓墓の 311 ㎡とあわせて史跡面積は、2,479.06 ㎡になります）

「北家」には主屋や座敷、新座敷、土蔵 3 棟があり、廣瀬家当主や家族などが居住し、主に生活空間と商業空間として使用されていました。「南家」は南主屋や隠宅、土蔵 2 棟があり、祖父母や父母の隠宅、親族の住居などとして利用されてきました。

淡窓は成人するまでは、主に「北家」に住み、病気療養や開塾後は「南家」に居住していました。とくに、淡窓が教育者の道を歩み始めると、「南家」の土蔵（現存していない）で講義を行っていました。

廣瀬淡窓の略年表

天明	2 年（1782） 1 歳	淡窓が生まれる。（幼名、寅之助）
寛政	1 年（1789） 8 歳	長福寺法幢上人から詩経を習う。
寛政	3 年（1791）10 歳	頓宮四極に弟子入りし、南家土蔵で講義を受ける。
寛政	9 年（1797）16 歳	福岡の亀井塾に入門する。
享和	1 年（1801）20 歳	頓宮四極の門人に句読を教える。
文化	1 年（1804）23 歳	南家土蔵で講義を行う。
文化	2 年（1805）24 歳	長福寺学寮を借り受けて開塾する。（3 月～ 6 月） 廣瀬家に戻り、南家土蔵で講義を行う。（7 月） 大坂屋を借りて「成章舎」と名付けて開塾する。（8 月～）
文化	3 年（1806）25 歳	「成章舎」から廣瀬家に戻り、南家土蔵で講義を行う。（6 月～）
文化	4 年（1807）26 歳	桂林園を開く。
文化	14 年（1817）36 歳	咸宜園を開き、転居する。
文政	5 年（1822）41 歳	廣瀬家南家を「北塾」とする。
安政	3 年（1856）75 歳	淡窓が没し、長生園に葬られる。

廣瀬淡窓旧宅の特色

旧宅は、略年表（裏面）にみられるように、延宝元年（1673）に廣瀬家初代五左衛門が現在地に移り住んで以後、現在にいたる土地の履歴がはっきりわかります。

現在残っている建物 10 棟のうち 9 棟には、棟木墨書や棟札が残っており、廣瀬家に所蔵されている日記にも建築記事がみられるなど、建物の建築年代を特定することができます。

こうした建物のなかでも、通りに面した主屋や南主屋の外壁は、廣瀬家の伝統的な家訓である「質素倹約」にもとづいた「荒壁（中塗）」仕上げとしています。

さらに、新座敷では能楽や三味線が披露され、隠宅では茶稽古や詩が詠まれるなど、幕末期の文化的、芸能的な場として利用されてきました。

このほか、淡窓が咸宜園に転居して後は頻繁に旧宅を訪れており、淡窓が歩いた路地も当時のままの様子で残っています。

廣瀬家に掲げられた家訓の「心高身低」の額

廣瀬淡窓旧宅と淡窓教育・思想・学芸

福岡亀井塾から帰ってきた淡窓は、享和元年に句読を教え、文化元年には廣瀬家南家土蔵で講義を始めます。その後は、長福寺学寮や成章舎を借りて開塾しますが、長くは続かず、廣瀬家に戻っては南家土蔵で講義を行っています。こうした初期の開塾時代や南家土蔵時代に、淡窓は後の咸宜園塾経営の基礎を築いていきます。咸宜園開塾後の文政 5 年（1822）には、咸宜園塾生が増加して廣瀬家南家南主屋を「北塾」と呼び、塾生の寄宿舎とするなど、淡窓旧宅は淡窓の教育心を育み、支えてきました。

廣瀬家では、主屋や南主屋の外壁を「荒壁（中塗）」仕上げとする「質素倹約」や「心高身低」を家訓としています。咸宜園独立後の淡窓は、天保 3 年（1832）に新居の招隠洞を建設する際にも日記に中塗と記しています。廣瀬家と淡窓が同じ家としての繋がりをもっていたことがわかり、淡窓が廣瀬家の家風を共有しながら歩み、淡窓の思想形成に大きな影響を与えてきたことが知られます。

さらに、新座敷は芸能的な場、隠宅は文化的な場として利用され、対外的にも社交的な場としての機能を備えていました。淡窓は幼少期から廣瀬家南家土蔵を中心に詩の教えを受け、とくにその詩風は頼山陽や菅茶山とともに江戸時代後期の三大漢詩人の一人に数えられるまでになるなど、淡窓の学問や芸能を育んできました。

今回の答申を受けて廣瀬家では、史跡の保護について以下のような取り組みを予定しています。

■ 廣瀬淡窓旧宅の公開活用

答申後の 11 月 19 日（月）からは、旧宅内にある次の施設等の公開を行っています。

① 「北家」主屋の入口部分を、廣瀬資料館入館者に新たに公開します。
② 「北家」新座敷の棟木墨書の説明を新たに加えます。
③ 「南家」の淡窓が歩いた路地を開放し、自由に見て、歩いていただきます。
④ 「南家」隠宅庭園を外から自由に見ていただきます。庭園内の散策を希望する方には、申出によって無料で庭園内を散策していただきます。

①

③

④

また、史跡の追加指定告示後は、次のような公開を予定しています。

① 指定記念特別展を開催します。（時期、入館料等は未定）
② 年に 1 回は、隠宅や座敷を一般に公開します。

■ 廣瀬淡窓旧宅建物の保存対策

廣瀬淡窓旧宅の追加指定後には、傷みのひどい建物の保存修理や、建物の防犯・防火対策等を検討し、旧宅建物の保存管理計画をまとめあげ、計画的な工事を進めていく予定です。

■ 廣瀬淡窓旧宅保管史料の研究取組

今回の答申を受け、財団法人廣瀬資料館では、廣瀬先賢文庫の所蔵品について次の活動を進めていきます。

① 廣瀬先賢文庫に保管している淡窓や廣瀬家史料の整理や展示公開を行います。
② また、こうした史料の保存に向けた調査研究を進めていきます。

● 旧史跡名称 廣瀬淡窓墓

廣瀬淡窓旧宅から南へ約 300m 離れた住宅の中にあり、淡窓や廣瀬家出身の咸宜園歴代塾主とその家族の墓地。「文玄廣瀬先生之墓」と刻まれた淡窓墓碑を中央に左右に計 12 の墓碑が並んでいます。

墓地内には、生前に淡窓が自選した「文玄先生之碑」が建立されています。

311 ㎡の広さの墓地は、現在廣瀬家が管理を行っています。